

QC1級おじさん、縄文時代に転移する

四葉 タト



かみじりょうじ

神路良二は新入社員向けに品質管理検定4級についての講義を行っていた。

会議室では、会社の未来を担う十名の若者が真剣に講義を聴いている。

仕事の合間を縫ってパワポで講義資料を作成。時間が足りず、自宅に持ち帰って講義内容を試行錯誤した。今年こそ新人の心に響く講義をしたい。そう思っていたが、今年もあまり反応はよくなさそうであった。

神路は今年で四十三歳。

やや丸顔で瞳が丸く、親しい部下からは優しい親戚のオジサンと言われる。褒められていると思いたい。

野球で鍛えた体力と、一度も歯医者に行ったことのない白い歯が自慢だ。日々のランニングも欠かしておらず、これも自身の品質管理だ、と割とストイックなタイプであるが、ラーメン屋巡りが趣味なだけあって腹回りの肉は管理限界の外側になりつつある。

講義の午前の部が終了して、昼食となった。

会社から近い蕎麦屋にでも行こうかと思い、直属の部下である姫野マイに声をかけた。

理系大学から入社した期待の新入社員だ。

仕事なのでメイクは抑えているが、立ち振る舞いが陽キャのギャルっぽく、誰とでも話せるコミュニケーションの高い、今どきの若者である。

蕎麦屋に向かう道中、講義の印象を聞くと、

「品質管理って……なんていうか、普通ですね。当たり前っていうか、まあ、大事なことだと思うんですけど？」

という言葉がかえってきた。

これは心に響いてない返答だと神路は思い、内心で頭を抱えた。

品質管理検定は、一言で言うと地味だ。

内容に触れたことのない人に話すのだいたい「管理だから……倉庫とか？」と言われる。

神路は姫野と蕎麦屋に入り、ざる蕎麦大盛りを食べ、蕎麦湯をつけ汁に入れた。

テーブルを挟んで前にいる姫野は「蕎麦湯って美味しいですよね～」とまだ自分の蕎麦をすすっている。

さて、後半の講義をどうしようかと思い、蕎麦湯で色が薄まり小さな湯気が上るつけ汁を一口飲む

だところで、急に目の前が真っ白になった。

「は？ えっ!？」

あまりの驚きにおかしな声が出てしまう。

上も下も、白い空間だ。手に持っていたはずの蕎麦湯が消えている。

パニックになりかけると、いきなり声が響いた。

『神路さん。あなたが適任です。これから私の管轄する世界に行って、困っている人々を助けてきてください』

いきなり聞こえた老人の声に、疑問が噴き上がる。

なんだこれ？ 幻影？ というか、この声って神様？ 俺死んだ？ 蕎麦湯が死因？ そんな馬鹿な。益体もない疑問が脳内を駆け巡る。

5W1Hだ。まずは5W1Hを確認せねば。品質管理の基本中の基本である項目が思い浮かんで混乱が落ち着いてくる。だが、口を開く前に老人の声が再び響いた。

『下を御覧ください』

すると、神路の足元に、縄文時代のような住居がある光景が映った。

「うわっ!」

自分が浮かんでいるように見え、思わず悲鳴が上がる。

『ご安心ください。あなたは風邪も引きませんし、病気になることもありません。人々を助けた後、日本にお戻しいたします』

「ちょっと！ あの?! 何がなんだかわかりませんが!」

『それでは期待しております』

「身体がゆっくり落ちてるんですが！ あの、ちょっと神様!」

神様のな何かに拉致され、そのまま訳のわからない縄文時代のような村に、ゆっくりと落ちていく。どうやら保護されているのか、光の膜のようなものに包まれているらしい。

ゆっくりと、竪穴式住居らしき村が近づいてくる。

眼下では、頭からかぶるチュニックのような貫頭衣を着た人々がおり、木の実を砕いて干したり、水を汲んで運んだり、作業をしていた。

すると、水を運んでいた少女が空から降りてくる神路を見つけて驚き、地面に水をぶちまけて、大声で指を差した。わらわらと村人らしき人たちが集まってくる。

「百人くらいいない?」

神路はどうすればいいのかわからず、苦笑いのまま、地面に降り立った。

光の膜が消えると、集団の一番前にいた長い白ひげの老人が、恭しく頭を下げ、こう言った。

「神様。どうか村をお救いください」

「……はい?」

こうしてQC 1級の資格を持つサラリーマン、神路の奮闘が始まるのであった。

四葉 夕ト
YOTSUBA YUTO

2016年第4回ネット小説大賞を受賞しデビュー。2020年には「転生七女ではじめる異世界ライフ」で第5回カクヨムWeb小説コンテスト大賞を受賞。漫画「パリピ孔明」「魔法空艇の案内係」などの原作も手がける。趣味は映画、音楽観賞、DJ、旅行など。